

# コニイン『五匹の子豚』

酒井邦嘉\*

本論では、アガサ・クリスティーによる小説『五匹の子豚』を読み解き、その作中で重要な役割を果たす神経毒「コニイン」について概観する。コニインはニコチン性アセチルコリン受容体の拮抗薬であり、末梢神経系に直接作用して運動性の麻痺を引き起こす。この毒薬の歴史は古く、ソクラテスの刑死に使われたことが哲学書『パイドン』に描かれている。そうした背景を踏まえて、クリスティーの人間観や創造力についても議論する。

**KEY WORDS** コニイン, ドクニンジン, 毒性アルカロイド

## はじめに

『五匹の子豚』(原題: *Five Little Pigs*, Fig. 1) は、1942年にロンドンのCollins社より発刊された。そのタイトルが一見地味であるためか、広く知られた作品とは言えないかもしれないが、名探偵エルキュール・ポアロの推理が冴えわたる屈指のミステリである。英国の英文学教授でミステリ作家でもあったロバート・バーナード(1936-2013)は、「クリスティー作品すべての中で、これがベストだと思い切って言いたい」と述べている<sup>1)</sup>。

米国版では、書名が *Murder in Retrospect* と変更された。このタイトルのおり「回想の殺人」が本作のテーマであり、物証に乏しい16年前の事件について、人々の記憶から「過去を掘りおこす」という趣向である。執筆の16年前と言えば、クリスティー自身が雲隠れした頃に重なり、自らの結婚生活の破綻がこの作品に投影されたと見ることもできる。

この作品で重要な役割を果たすのが「コニイン(*coniine*)」という神経毒である。実は、その作用が運動性であることが、作中のプロットに不可欠だった。本論では、未読の人の楽しみをそがないように留意しながら、毒物や人間の心理に対するクリスティーの深い洞察を明らかにしたい。



Fig. 1 『五匹の子豚』  
アガサ・クリスティー, 山本やよい 訳, 早川書房

なおこの作品は、*Go Back for Murder* (『[過去の]殺人に戻れ』) というタイトルで、クリスティー自身によってのちに戯曲化された<sup>2)</sup>。クリスティーの戯曲ではよくあることだが、ポアロに代わって別人が探偵役となっており、主人公のロマンスも加味されている。

東京大学大学院総合文化研究科相関基礎科学系 (〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1)

\*[連絡先] sakai@sakai-lab.jp



Fig. 2 Jacques-Louis David (1787), *La Mort de Socrate* (The Metropolitan Museum of Art, New York)

## 1. コニインの毒性について

### 1. 神経系への作用

コニイン ( $C_8H_{17}N$ ) は、ドクニンジン (学名 *Conium maculatum*) に含まれる毒性アルカロイドの1つである。それらのアルカロイドは、共通して「ピペリジン」という化学構造を持つ。単結合のみで環状になった6個のメチル基 ( $-CH_2-$ ) のうち、1つをアミン ( $-NH-$ ) に置き換えるとピペリジンになる。さらにコニインは、アミンの隣のメチル基にプロピル基 ( $-CH_2-CH_2-CH_3$ ) が付いた構造である。非常に毒性が高く、コニインの致死量 (マウスの静脈注射における  $LD_{50}$  値) は7~12 mg/kg である<sup>3)</sup>。これは、青酸カリ (シアン化カリウム) の毒性に匹敵する。

コニインの効果は特異的である。最初に足や下肢に麻痺が生じ、数十分の時間をかけて麻痺がゆっくりと全身に拡大する。急激な痙攣発作や息詰まりはないが、頻脈に続いて徐脈が生じ、最終的に呼吸困難に至る。以上の徴候から、コニインの主な作用部位は末梢神経系 (体性神経と自律神経の両方) の受容体だと予想できる。コニインは最も早く構造が決定され人工合成されたアルカロイドであり、ニコチン性アセチルコリン受容体 (nicotinic acetylcholine receptor : nAChR) の拮抗薬であることが既に示されている<sup>4)</sup>。微量のコニインには鎮痛効果があり、中毒性の副作用が少ないことから、医学的な利用の可能性もある。

『五匹の子豚』の作中で犯行に使われたのは、「臭化

水素酸コニインの濃い溶液」(p83<sup>5)</sup> — 訳本のページ引用、以下同様) だった。また、「あの日は、お茶にやってきたみんなに、マダラドクニンジン (spotted hemlock) のことをくわしく説明した覚えがあります。ドクニンジンは一年おきに花をつける。実が熟してきたら、黄色くなる直前に摘みとる。そこに含まれている成分がコニインで、……わたしはそれが百日咳や喘息に効くことを証明し——」(pp137-138) とある。「毒薬変じて薬となる」のだろうか。

このドクニンジンは、ニンジンやパセリを含む「セリ科」に属することから想像できるように、食用の野菜と間違えたことによる死亡事故がヨーロッパなどで報告されている。コニイン摂取の初期症状からの徴候を知っておくことは、救急措置に役立つだろう。いまだ解毒薬はないので、胃洗浄に加えて、活性炭による消化管内の毒物吸着が必要とされる。

### 2. プラトンによる描写

クリスティーは、『パイドン』(英題: *Phaedo*) の一節を朗読する場面 (pp145, 286, 337) を繰り返すことで、推理に対する間接的なヒントを提示している。『パイドン』はプラトン (427-347 BC) による哲学書で、師ソクラテス (c.469-399 BC) の刑死の場面が克明に描かれている (Fig. 2)。ソクラテスは、「不敬神」と「若者たちを墮落させた」とのいわれもない罪を着せられ、自ら毒杯を仰いだのだった。牢獄に居合わせた1人であるパイドンはソクラテスの熱心な弟子であり、ソクラ

テスの最期について『パイドン』の終結部で次のように証言している。

「あの方（ソクラテス）は歩き回って、両脚が重くなってきたと言って、寝台に仰向けに横になられました。そうするように、あの男（毒薬を与えた男）は命じていたのです。すると同時に、毒薬を与えたその男が彼に触れて、間をおいて、両脚や足先を調べて見ていましたが、その後で足先を強く押してみても、感覚があるかねと尋ねました。あの方は、ないと答えました。その次に今度は脛の部分を押しました。そうして触診する部位を上げながら、私たちに、冷たくなり、硬直しつつあると示しました。そして彼は触りながらこう言いました。『これが心臓までやってきたら、その時、彼は逝くだろう。』

すでに、あの方の下腹部あたりはほぼ冷たくなっていました。すると、顔を布で覆っていたのですが、その覆いを除けてあの方は言われました。（中略）

これが、エケクラテスさん、私たちの友人で、あの頃私たちが巡り合った人々のうち、語り得る限りでもっとも善く、もっとも叡智に富み、もっとも正しくあった人の、最期でした。<sup>6)</sup>

この記述が正確であるなら、ソクラテスは呼吸筋の麻痺直前まで意識が清明で、言葉を発することもできたことになる。

ギリシア時代は、既にアヘンやドクゼリなどが毒薬として使用されていたようだが、『パイドン』には「薬 (pharmakon)」という記述しかないため、長らく毒物が特定されなかった。しかし、ドクニンジンとパセリと誤って摂取した死亡事故 (1845年) によって、上記の特異的な症状が確かに再現したのである<sup>7)</sup>。

余談だが、人間が生み出す技術はコニインと似ているかもしれない。機械化により、まず四肢を使った仕事が徐々に奪われ、いまや「生成 AI」によって言葉までもが侵されようとしている<sup>8)</sup>。

## II. 作品の背景と人間観

### 1. 基調となる童謡

『五匹の子豚』の元となった英語の童謡 *This Little Piggy* は、18世紀頃からは知られているという。

This little piggy went to market, (この子豚は市場へ出かけた)

This little piggy stayed home, (この子豚は家にこもった)

This little piggy had roast beef, (この子豚はローストビー

フを食べた)

This little piggy had none, (この子豚には何もなかった)

This little piggy cried “Wee! Wee! Wee!” all the way home. (この子豚は家までずっと「ブーブー」泣き通しだった)

子どもたちは、これを歌いながら五本の足指を親指から順につまんでいくのだそうだ。小さくふくらんだ五本の足指を子豚に見立てているのが愛らしい。

『五匹の子豚』では、いわゆる「童謡殺人」のように、わらべ歌のとおり連続殺人が起こるのではない。被害者はコニインで毒殺された有名画家、エイミアスただ一人。そして獄死した容疑者キャロライン (エイミアスの妻) を除けば、事件関係者が五人いて、「五匹の子豚」に見立てられる。

- 1) フィリップ：この男性は株式「市場」へ出かける株式ブローカー (幼なじみ)
- 2) メレディス：この男性は家にこもって薬草を栽培する研究者 (フィリップの兄)
- 3) エルサ：この女性はプライドの高い貴婦人 (エイミアスの浮気相手)
- 4) セシリア：この女性は憤ましい教育者 (アンジェラの家庭教師)
- 5) アンジェラ：この女性は逆境に打ち克つ考古学者 (キャロラインの妹)

『五匹の子豚』の章立てでも、「五」を基調としている。第一部の五章にわたる導入に続き、童謡に対応した順番で「この子豚は……」という章が五つある。第二部もこの順を踏襲して、各人の「手記」が明かされ、第三部の謎解きも五章より成る。

### 2. クリスティーの人間観

『五匹の子豚』の価値をさらに高めているのは、クリスティーによる人間観察の深さである。「人間という生きものが不可思議な驚きに満ちていることはたしかです。でも、姉の場合は、特別な理由があったんです」(p226) というアンジェラの洞察。そして、「わたしの成功の基礎となっているのは、心理の探究です。人間の行動に対する“なぜ?”という永遠の問いかけ。(中略) 現代においては、犯罪のその点に関心が向けられています」(p104) というポアロの自負と、「正直さゆえに、よけいな苦痛や悲しみがたくさん生まれるものです」(p135) というポアロの感傷。

次の老弁護士とポアロの会話は、クリスティーの自問自答のように聞こえる。

「ムッシュ・ポアロ、あなたが興味を持っておられるのは——人間の性格、そうですね？」

ポアロは答えた。「たしかに、どの事件の場合も、わたしにとって最大の興味はそれです」

「それはわたしも理解できます。いわば、犯罪者の心のなかに入りこむわけですね。じつに面白そうだ。興味が尽きません。」(pp61-62)

そしてポアロには、灰色の脳細胞 (little grey cells) がある。ポアロ曰く、「本当にものを見ることができるのは心の目だ、ということをお願いしたかったです。」(p362)

### 3. クリスティーの創作力

作中のアンジェラは、15歳ぐらいの少女時代を回想して次のように語っている。「そのころはちょうど、言葉の魔力に突然目覚めた時期でした。本で読んだもの——シェイクスピアの詩の断片など——が、頭のなかでこだましていました」(p334)。「言葉の魔力」は、この年頃の子どもの多くが体験するもので、クリスティーにとって後の創作力の糧になったのだろう。

そのアンジェラに対して、「事件のあった当時、サマセット・モームの『月と六ペンス』を読んでおられたではありませんか」とポアロは問いかけ、その推理はみごとに的中した。「あなたにお伝えしたかったのです、マドモアゼル。ほんの小さな、つまらないことに関しても、わたしが魔術師のような力をもっていることを。わたしには、教えてもらわなくてもわかることがあるのですよ」(p364)。

この部分から、『五匹の子豚』の創作過程について興味深い手がかりが得られる。執筆当時のクリスティーにインスピレーションを与えたのは童謡だけでなく、

『パイドン』と『月と六ペンス』(1919年発表)を読み直したことはないだろうか。『月と六ペンス』の主人公は天才画家であり、やはり三角関係が数奇な運命を暗示している。

優れた芸術作品が他者の創作に与える靈感は、音楽でも見られる。第二交響曲を作曲中だったグスターフ・マーラー(1860-1911)が、ハンブルクの聖ミヒヤエル教会で聴いた合唱曲も同様だった。のちにマーラーは、「それは稲妻のように私を貫きました。そしてすべてがくっきりと、明確な姿をとって私の魂の前に立ち現れました！ 創作者とは、このような稲妻を持っているもの、これが『聖なる受胎』なのです！」と回想している<sup>9)</sup>。

### おわりに

『五匹の子豚』には、優れた映像化作品がある。名優デヴィッド・スーシェ(1946-)扮する『名探偵ポワロ』(テレビシリーズ)の一作(Series 9, 2003年)だ。事件は14年前という設定で、獄死が絞首刑になっていたり、新たな三角関係が描かれたりといった細部の相違はあるが、原作の妙味を損なっていない。各人の視点を再現したカメラ・ワークが秀逸で、背景の音楽も素晴らしい。原作を読んでから観ても、観てから読んで楽しむだろう。

最後の謎解きまで、本と映像の両方で人物描写や状況設定を頭に入れておき、そこで中断して推理してみるのも一興であろう。ただし、クリスティーが「ミスディレクションの女王」であることを忘れてはならない。本作で犯人・動機・手段・機会を合理的に導き出すのに必要な推理力は、大学院卒業レベルだろう。

### 文献

- 1) Barnard R: A Talent to Deceive: An Appreciation of Agatha Christie. Fontana/Collins, Glasgow, 1990, p85
- 2) Christie A: Go Back for Murder. Samuel French/Concord Theatricals, London, 1960
- 3) Lee ST, Green BT, Welch KD, Pfister JA, Panter KE: Stereoselective potencies and relative toxicities of coniine enantiomers. Chem Res Toxicol **21**: 2061-2064, 2008
- 4) Hotti H, Rischer H: The killer of Socrates: coniine and related alkaloids in the plant kingdom. Molecules **22**: 1962, 2017 [doi: 10.3390/molecules22111962]
- 5) アガサ・クリスティー (著), 山本やよい (訳): 五匹の子豚. 早川書房, 東京, 2010
- 6) プラトン (著), 納富信留 (訳): パイドン—魂について. 光文社, 東京, 2019, pp257-259
- 7) キャサリン・ハーカップ (著), 長野きよみ (訳): アガサ・クリスティーと14の毒薬. 岩波書店, 東京, 2016, p134
- 8) 酒井邦嘉: 生成AIによって人間は何を失うのか. kotoba **53** (秋号): 71-77, 2023
- 9) 村井 翔: マーラー (作曲家◎人と作品シリーズ). 音楽之友社, 東京, 2004, pp79-80

**Title**

Coniine, in *Five Little Pigs*

**Author**

Kuniyoshi L. Sakai

Department of Basic Science, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan

**Abstract**

In this manuscript, I provide some insights into the novel *Five Little Pigs* (US title: *Murder in Retrospect*) by Agatha Christie, and overview the neurotoxin *coniine* that plays an essential role in that story. Coniine is a nicotinic acetylcholine receptor antagonist, and induces a slowly spreading effect of paralysis by acting directly on the peripheral nervous system. This agent has been used as a poison for thousands of years; indeed, the philosophical text *Phaedo* describes that coniine was used to put Socrates to death. Based on this background, Christie's views on human nature and her creative powers are also discussed.

**Key words:** coniine; spotted hemlock; poisonous alkaloid